

## 2022 年度学修成果に関する調査について（総評）

2022 年度は 昨年度 年度と同様に新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の影響により、Web でアンケートを実施した。例年は授業中に紙面で実施していたため、例年と回答者の性質が異なっていること、さらに学科によって回答率が大きく異なっていることに留意する必要がある。そのうえで、各学科の結果の特徴を踏まえ 2022 年度の学生調査結果を総評する。

まず、全体的な傾向として、コロナ禍時に低下していた【コミュニケーションの能力】【人間関係を構築する能力】【他の人と協力して物事を遂行する能力】など対人にかかわる能力がコロナ禍前の水準に戻りつつあることが確認できる。しかし、【リーダーシップの能力】【異文化の人々と協力する能力】については低下したままである。これは、コロナ禍により、そういった能力を養成する授業や授業外活動（アルバイト、部活動、ボランティア等）の機会が減少したことなどが大きく影響していると考えられる。ただし、2022 年度は、実験・実習を中心に対面授業の受講機会が大きく増加したことから、それらの実感値は 2021 年度に比べ増加していることも確認できる。

次に、学科別に、【各年度入学の回生別比較】では各年度が上がるにつれほとんどの学科の能力の実感値が向上している。これは本学の教育が学生の能力の向上に寄与しているものと考えている。

また、本調査項目は、専門分野によらず学士課程で共通して身につけるべき知識・能力が設定されているが、学科によって結果に大きなばらつきが見られる。文系・理系といった根本的な違いがあるため、ある程度は仕方ないものの、【数理的な能力】や【外国語運用能力】については、上位年次に進むにつれて、学生が「減った」という実感をもっている結果が、一部の学科で確認できるため、注意が必要である。

以上のような結果を踏まえ、「学修者本位の教育の実現」を図るという観点から、カリキュラムや授業内容・方法などについて、より積極的に改善を進めていく必要がある。